

中津隊、増田宗太郎

― 歴史を訪ねる旅 (5) ―



下土橋 渡

平成二十六年（二〇一四年）の正月は、長男家族も次男夫婦も帰省できないというので、大晦日から、次男夫婦の住む福岡県内のホテルに宿をとって過ごしました。明けて元旦は、連れ合いと次男夫婦たちは福袋を目当てにデパートへ買物。そこで、著者はひとり別行動をとって大分県の中津を訪ねました。

中津城は黒田官兵衛が築城を開始し、細川忠興が完成させた城です。折しも、その年のNHK大河ドラマは『軍師官兵衛』だったので、幟があちこちにはためいていました。

また、中津は福沢諭吉が幼年期から十九歳までを過した地です。そして、中津城には、増田宗太郎が組織して西南の役に従軍した中津隊の碑があります。中津への小旅行は、その歴史を探る旅でもありました。

一、福沢諭吉

勝海舟が艦長を務める咸臨丸に乗り込んで、福沢諭吉が、ジョン万次郎とともに渡米したのは、万延元年（一八六〇年）、福沢二十五歳のときのことでした。七年前の嘉永六年（一八五三年）には、ペリー提督の率いる黒船が浦賀に来航、七年後の慶応三年（一八六七年）には、第十五代将軍徳川慶喜が政権を朝廷に返上する、いわゆる大政奉還が行われるという、まさに、明治維新へ向けての幕末の混乱期のまっただ中でした。

帰朝後、福沢は幕府の外国方に雇われます。以後、ヨーロッパ諸国も歴訪し、社会の制度



福沢諭吉旧居（中津市）

や考え方などに旺盛な好奇心で見聞を広めました。その後、『西洋事情』『学問のすゝめ』『文明論之概略』など多くの著書が続々と出して、当時の日本人に西洋文明の精神を伝え、わが国の民主主義思想の普及に大きな影響を与えました。

この福沢諭吉が、兄三之助のすすめで蘭学を学びに長崎へ出る十九歳までの幼年期を過ごした大分県中津市に旧居が残されていて見学することができます。旧居内には、立て札が立てられ、旧居にまつわるエピソードがいくつか紹介されています。その一つが『刺客に狙われた話』です。

刺客に狙われた話

明治三年一〇月、母と姪を迎えに中津に帰った時の事です。中津の若い藩士のかなには、諭吉を西洋かぶれと嫌い暗殺しようとする者がいました。その動きを察

知した服部五郎兵衛（福沢家の親戚）は夜福沢家を訪問し、いつまでも酒を飲みながら夜中の1時を過ぎても話し込んでいたので、諭吉が寝入るのを狙っていた刺客はその機会を逃し、諭吉は命拾いをしました。（旧居内の立て札より転載）

二、増田宗太郎

このエピソードに登場する刺客こそ、のちに中津隊を組織して、西南の役へ従軍する増田宗太郎（一八四九〜一八七七年）でした。増田は、中津藩下士増田久行の嫡男として生まれます。母は九州国学の三大家の一人で、平田篤胤直系の弟子である渡辺重名の娘。父は儒学者・福沢百助の妻のいとこですから、福沢諭吉とは再従兄弟の関係にあり、家も近くにあります。渡辺重名の孫の渡辺重石丸が始めた国学塾に入門し、平田篤胤派国学を



『西南役中津隊之碑』の大顕彰碑（中津城公園地内）

学び、尊王攘夷思想に開眼します。明治三年（一八七〇年）、上京して政府の文明開化・開国和親の方針を確認した増田は、維新政府に幻滅と深い憎悪を抱きました。

時代の文明開化のリーダーは、再従兄弟の福沢諭吉。諭吉への不満を募らせた増田は同志と暗殺計画を企てます。明治三年に諭吉が帰郷した際、寝込みを襲おうと福沢邸に乗り込むものの、諭吉は来客した服部五郎兵衛と夜通し飲み明かしたためこの計画は失敗し、逆に諭吉に心服し、そのまま藩邸の慶應義塾に入学することになりました。

明治七年（一八七四年）に佐賀の乱が勃発すると、中津士族を統合して数百名を集めて部隊の編成に成功し、江藤新平に合流しようとして佐賀に赴きましたが、増田らが到着したとき、乱はすでに鎮圧されていました。

帰郷して中津に自由民権運動の結社を設

立。板垣退助が林有造を送って祝したともいわれます。村上田長によって、自由民権・主権在民を掲げた『田舎新聞』が創刊されると編集長を務めます。

三、西南の役

明治一〇年（一八七七年）に西南の役が勃発すると六十四名で中津隊を結成し、三月三十一日蜂起。中津支庁や大分県庁を襲撃し、四月五日熊本県の阿蘇郡で西郷軍に合流、中津隊は以後各地に転戦。増田は最後まで西郷隆盛に付き従い、最後は鹿児島城山の戦いで戦死したとも、捕えられて斬首されたともいわれます。享年二十八。

司馬遼太郎は、著書『翔ぶが如く』（文藝春秋）で、「中津隊の首領増田宗太郎については、触れるべきことが多い」と書いています。



薩軍最後の軍議（西郷隆盛宿陣跡資料館（宮崎県延岡市児玉熊四郎宅））



西郷隆盛宿陣跡資料館から見上げる可愛岳

西南の役最後の激戦『和田越の決戦』（宮崎県延岡市）において敗れた西郷隆盛は、翌日の明治一〇年八月十六日、薩軍に解軍の令を出します。官軍が包围する可愛岳を突破して山中を彷徨中、三田井（宮崎県西臼杵郡高千穂町）に達した頃、増田は中津隊の残存者につきのように告げます。

『薩軍は鹿児島にむかう。われわれ中津隊の役目は済んだ。ここから北すれば、故郷の豊前へ帰ることができる。誰彼よ、ここから中津へ帰れ。』

すると、中津人たちは、増田だけ薩軍にとどまり、他に対しては故郷へ帰れというのは道理にあわないと、そのあいまいさを衝いてきました。そこで、増田は、『自分は諸君から選ばれて隊長になった。隊長になると、自然、西郷という人格にしばしば接した、諸君は幸いにも西郷を知らない、自分だけがそれを知

ったが、もはやどうにもならぬ』といい、たちまち涙を流します。増田宗太郎が、このときいった言葉が中津の人々に記憶されているといえます。

吾（われ）、此処（ここ）に來り、始めて親しく西郷先生に接することを得たり。一日先生に接すれば一日の愛生ず。三日先生に接すれば三日の愛生ず。親愛日に加はり、去るべくもあらず。今は、善も悪も死生を共にせんのみ。

四、天賦人權論

肥後国荒尾村（現熊本県荒尾市）に生まれた宮崎八郎（一八五一〜一八七七年）という人がいました。ルソーの『社会契約論』の部訳である中江兆民の『民約論』に影響を受け、自由民権運動のリーダーとして、明治八

年（一八七五年）、熊本県植木町に『植木学校』を設立します。西南の役が勃発すると、民権家同士と『熊本協同隊』を結成し、薩軍に合流。桐野利秋のもとでも政府軍を相手に戦いますが、志半ばで熊本県八代市にて戦死しました。享年二十六。

増田宗太郎と中津隊が薩軍に参加したのは、薩軍が田原坂を敗退して形勢が悪化してからであり、薩軍の敗勢を十分に知りつつの参加でした。そして、増田は募兵において、『人民天賦の権利を回復し』と書いて檄を飛ばしたといえます。

司馬遼太郎は、『翔ぶが如く』に、「熊本協同隊がルソーの民約論を聖書としたような徹底性はなくとも、福沢仕込みの英国風の天賦人権論は増田の脳裏にあったに相違なく、この点、士族の権益の回復をねがうエネルギーとは別趣の思想をもっていたといっている。」

と書き、「福沢は、反対党を許さない政権をかれの近代思想の立場から憎悪した。その意味で西郷と西南の役を大きく評価し、そのなかに増田以下の中津士族がいたことになっても満足した。」と書いています。

鹿児島市の南洲墓地に『中津隊士之墓』と『増田宗太郎墓』があり、大分県中津市の安全寺にも増田宗太郎の墓があります。また、中津城公園地には、水島鍊也（中津出身、神戸高等商業学校（神戸大学の前身）の創立者）によって『西南役中津隊之碑』の大顕彰碑が建てられています。

（元九州職業能力開発大学教授）

